

震災から数年、コタローとポンタは どうなったかな？ 新作の紙芝居を制作中！

今 年度4年目を迎えた、青少年すこやか育成事業（公益財団法人JKAの補助事業として平成24年度からスタート）では、現在、新作の紙芝居を制作しています。

今作は、東日本大震災の直後に現地取材を行い制作した、前作「つなみのひ」の世界観はそのままに、震災から数年後が舞台になっている作品です。

その制作のため、改めて岩手県宮古市、宮城県石巻市の現在を取材しました。

宮古市では、大きな津波の被害に幾度となく遭ってきた田老地区を訪問。昭和8年の昭和三陸津波を経験した、荒谷アイさんと四女・荒谷栄子さんにお話をうかがうことができました。

日 本一の防潮堤と呼ばれた、高さ10m以上もある防潮堤付近は、当時津波にのまれ、今もまだ更地が広がっています。ここは過去にも津波被害を受けている地区で、全戸高台移転の計画もあり、荒谷さん母娘は高台に転居されていました。しかし、やはりその土地を愛し離れがたい方も多く、家屋が流されたその場所に、改めて住居を構える方も少なくないそうです。

同 じく津波被害を受けた石巻市でも海岸沿いは更地が多く、少し離れた場所から建物が立ち並んでいました。

こちらの市内では、小学校2校、中学校1校の先



上：石巻市内の高台に位置する日和山公園からの景色
右：蛇田中学校の生徒が震災後に作成したイラスト



生方にお話をうかがいました。

当時、何らかのストレスを抱えていた子どもがいる一方で、「子どもは生まれながらに生きる力を持っている」と感じさせるほど前向きな子どもも多く、大人たちは子どもたちの声や笑顔に支えられたとおっしゃっていました。

震 災直後から現在までの子どもたちや地域の様子を見て、体を動かす、音楽を聴く、歌を歌うといったことが気持ちを前向きにさせ、地域や他人との結びつきを強くし、それがより前を向く力になると感じる先生方も多いようです。

宮古市、石巻市ともに、あちらこちらに津波が来た高さを示す青いラインが引いてあり、改めて津波の大きさを感じました。



宮古市内の道の駅

建物の半分まで津波がきました



田老地区の防潮堤の上から見た現在の風景

3年前に制作した「つなみのひ」の主人公は、コタローとポンタのふたりでしたが、今回の作品にはもうひとり、新たな主人公が登場します。ふたりが住む村に引っ越してきたこのキャラクター、少し臆病なところがありますが、コタローとポンタ、そして自分に、ちょっとしたことだけれども大きな変化をもたらします。ふたりが三人になったとき、どんなことが起こるのか…。



東日本大震災の被災地取材の内容を盛り込んだ、新作紙芝居は2月初旬の完成予定です。ぜひ楽しみに！

